

書 評

伊達 宗泰 著

『日本古代文化圏の形成と伝播』

学生社 1991年3月

A5判 305ページ 6,800円

著者は、過去の生活空間の環境復原や地域性の問題を扱う考古地理学の立場に立つ。かかる分野は藤岡謙二郎により提唱され、小野忠照によって体系づけられたが、本書はそれを継承しさらに発展させたものである。藤岡謙二郎著『地理と古代文化』の影響を受けて、人間活動を追究する際の地理的環境の重要性を認識したところに、研究の出発点は求められる。そして、水と人間生活との関係に注目し、「畿内における古墳立地の一考察」(1958)を公して以来、考古地理学的視点が貫かれている。研究の重点は1980年代半ばまで地域論におかれるが、その後は文化論とりわけ古墳時代の精神的側面に関心が向けられ、そこに研究対象の時代的变化がみてとれる。

本書には13編の論考が収録され、総計1,000に及ぶ遺跡の分析と考察が進められている。その成果は78の図表に整理され、とりわけ視覚的表現を意図した遺跡の分布図等に著者の地理学的視点が伺える。本書を構成するにあたり、“地域圏の形成”と“文化圏の拡大”の二本の柱を立て、奈良盆地及び畿内を主たる研究対象地域として、独自の地域論が展開される。またその方法論においては、演繹的方法が採用される。そして、遺跡の分布からみた集落の形成要因とその過程、さらには集落内や集落間の構造を、地理的特性という視点に求め、領域や地域圏の問題解決への新たな試みが提示される。

もとより、考古学と地理学を修め、両側面から古代文化の諸相とその空間的展開の過程を解明する試みは、著者に必然的に与えられた課題といえよう。

こうして、水を媒介に結合する人間集団と水支配地域を単位として成立する支配者とが統合されて、一つの生活圏や支配圏を形成するという結論が導かれる。そしてこれを行政上の単位と想定したことが、第1部の古代地域圏の形成の足掛かりとなる。

地域圏成立の根幹をなすのは“水と人間生活との関わり合い”である。かかる前提に立って、地域を生活の場としての範囲とみなし、人間生活のなかで

圏構造をとる統一性として水利灌漑等の問題をすえる(第1章「生活圏の形成」)。また、地域内結合の指標を水系に求め、初期の水田開発の過程を追究する(第1節「初期水田農耕の展開」)。そこでは、初期農耕期の自然環境と開拓前線の拡大の問題を検討し、弥生集落の時期的変遷や初期農耕の開発の経過をたどる。第2節では、平地開発についての問題点を取り上げられる。ここでは、経済圏、文化圏、勢力圏など面の立場から遺跡を分析する必要性を唱え、“水支配地域”を設定してこれを領域につながる地域形成の根幹としている。さらに、水田の立地と微地形との関係を論じ(第3節「開発の進展」)、「遺跡の景観は現景観より古環境の復原が重要であり、それによる地域分類が検討されるべき」であり、「遺構の立地環境などにおいては、古地理の復原と微地形の検討・分類を行い、各地域の遺跡も同じ範疇で分類をしていかなければならない」と強調する。

このように、遺跡の立地と地形との関わりや、地域集団の経済的基礎である生産地域の問題点が指摘され、これら諸要素間の有機的な関連が模索される。

次章では、論点は地域圏の形成に向けられる。すなわち、奈良盆地内の地域圏の形成を考察するに際して、地域を地理的な特性を備えた一空間と認識し、政治上の単位に基づいて地域性をとらえる政治区分の考え方が採られる(第1節「遺跡分布よりみた古代地域」)。そして、古墳の立地と集落や生産地域との関係についてふれ、「古代共同体の居住地域が精神的な結合点として神社、生産的な結合点として水を媒介としていることが感じられ、それが古墳群—集落—神社—生産地域と関連づけている」とする。さらに、郡レベルでは水系とその流域平野を擁した単位を一つの地域とみなす。仮説として提出された上記の水支配地域に関する論考は、次節で検証される(第2節「地域形成の一要因」)。そして、在地豪族層の成立する自然環境と経済的基盤が、かかる方法論によって推定可能であるとしている。こうした平野における地域の形成論に対して、第3節では大和・宇陀山地の山村空間にみる考古学的特性が検討される。そして、古墳の推移と変化を地理的特性と山村空間の考古学的特性の結果であるとし、自然環境の制約と地域形成に関する新たな見解が示される。

第3章では、こうした古墳を築造し得た権力者（首長層）とその生産地域との関係を究明し、領域の形成論へと発展する。著者は領域を統治権の及ぶ範囲と認識し、古墳と領域との関係に着目して古墳群の見直しをはかる（第1節「古墳群設定への一試案」）。すなわち、古墳及び古墳群の存在を考える際に、経済基盤である農業と生産地域との関係を説き、地域の把握とそのなかでの古墳群のあり方についての問題点を示す。そして、古墳の分布を水支配地域ごとに把握して、群構成に入るべき再考を試みる。これは、奈良盆地北東部の古墳や古墳群の文化圏の広がりとその性格について考察し、また和爾氏との関連を明らかにした第2節「上代の文化圏成立とその背景」に依拠している。そして、地域集団の首長層と生産地域との関係に基づいて地域を把握するという観点に立ち、その傍証として、地域のなかでの古墳群の位置づけや、農業基盤となるべき水利の問題に焦点をあてる。そこでは、水利や耕地が古墳時代の協業分化と多様化の過程で再編成されることになる。また次節では、自然村落が地域集団となり、それらが統廃合されたのち行政単位として組み込まれていくという立場をとり、行政区画がいかなる要因で構成されていくかを畿内を事例に追究する（第3節「畿内とは」）。そして、政治集団の出現と淀川水系の交通系による集団の環状結合が、畿内における政治中枢地域の構成要因である、という結論を導き出している。

以上のように、“一水支配地域が領域の一単位である”とする地域設定法は、第1部における一貫した主張となっている。こうして、奈良盆地を中心とした弥生～古墳時代の遺跡の分布や立地に基づいて地域論を展開したのち、著者の関心は精神的側面とその空間的展開に注がれる。すなわち、第2部では古墳の埴輪祭祀の意義と伝播が再検討され、文化圏の拡大へと発展する。

その一指標として円筒系埴輪と祭祀の問題を取り上げ、とりわけ古墳時代中期以降に出土例を増す埴輪に注目して埴輪と祭式との関係を論じたのが、第1章「埴輪祭式の持つ意味」である。そこでは、埴輪を再分類して円筒系埴輪を位置づけたのち（第1節「円筒系埴輪の呼称と分類についての再検討」）、桜井市メスリ山古墳出土の高杯形埴輪に焦点を絞って、埴輪祭式の持つ意味やその初現と経緯について考察する（第2節「高杯形埴輪について」）。さらに、

新沢千塚古墳群の祭祀型の分類とその変化に基づき、葬喪における最終的儀礼が古墳時代を通じて存在したことが確認される（第3節「古墳墳丘上祭祀の問題」）。

また次章では、埴輪祭祀の空間的拡大と装飾古墳について論究する（第2章「埴輪祭式の伝播」）。そして、埴輪樹立の配置が古墳被葬者の権力の誇示と示威の象徴として発達した、と結ぶ（第1節「埴輪祭祀論序説」）。また、大規模前方後円墳を中心に埴輪祭祀のあり方を検討し、円筒系埴輪列のもつ祭式の意味を、初期大和政権の権力者すなわち大王墓の祭式形態とみなす。次に、埴輪祭式の伝播を追究して、東国におけるその受容と大規模墳の出現との時間的空間的ズレを明らかにし（第2節「東国地方への伝播」）、これを各地の盟主層の盛衰と大和政権との関係に求める。さらに、埴輪と装飾古墳の検討を試み（第3節「埴輪と壁画」）、葬喪儀礼の問題点を指摘する一方で、その変化についての新たな見解が示される。すなわち、従来の“葬喪儀礼”を葬と喪の儀礼に分ける必要性を説くとともに、葬の儀礼とりわけ葬地における荘厳具として埴輪を位置づける。こうして著者は、埴輪を古墳文化の重要な要素とみなし、その配置と用途の側面から、大和政権の勢力圏拡大に伴う埴輪祭式の意義とその伝播を究明する。

本書の目的の一つは“日本の古代地域を抽出する方法”を模索することであり、検証例として大和とその周辺地域が選定された。考古地理学的視点に立ち、政治・経済・文化活動という人間生活のありようを、水を指標として地域に展開し、さらに埴輪を媒介とする文化圏の解明を試みた。こうして独自の地域論を開拓した著者の業績は大きく、ここに新たな研究の視点と方法論の確立が提示されたといえよう。

ところで、「古代の環境を考える場合、埋没した河川や微地形の細かい観察による環境復原が強調される」と、著者はいち早くその重要性を示唆している。また、奈良盆地における自然堤防の形成が古代以前に遡る可能性の少ないことを示し、地表面の観察のみによる方法論の限界性を指摘するとともに、平野の開発を研究するうえでの方法論的転換の必要性を説く。著者の提唱する水支配地域論にさらに説得力を持たせるには、旧地形や旧水利の復元とともに、地形帯や微地形ごとの遺跡の立地の検討が、今

後一層必要となるに違いない。

なお、生産地域についての具体的な資料の分析が望まれるところであるが、かかる点は著者の今後の研究の成果を待つことにして、拙い評としたい。

(外山 秀一)

田中 圭一 著

『帳箱の中の江戸時代史(上)』

刀水書房 1991年8月

A5判 507ページ 6,800円

「帳箱の中……」とは、何とも魅力的な意表をついたタイトルではないか。思わず開けてみたくなるような書物である。」

この一文で書評を終えれば、それは書評の中の最高傑作として後世に残るでしょう。どんな金銀財宝が出てくるか、開けた人の楽しみにとっておいてあげるのが評者の思いやり、というものだからです。しかし、そんな思いやりなどどこかへ吹き飛んでしまい、評者はいつのまにか、宝を見つけた子供のように、誰かれかまわず発見の喜びを言いふらしたい衝動にかられてしまいました。

宝が出てくるはずです。開いたら、佐渡が飛び出てきたのです。しかもその佐渡は、金掘人夫すべての、そして260カ村の農民一人一人の顔すべてをたちどころに判別出来る能力をお持ちではないかと拝察される、佐渡出身の田中圭一氏の手によって描かれているから、偽物ではありません。

江戸時代史とはいっても、書かれているのは佐渡だけではないか、という批判が出るかもしれません。しかし、それでいいのです。それだからいいのです。この書物の最大の魅力は、佐渡が江戸を、僻地が中央を果敢に攻撃している点にあるからです。佐渡は僻地を代表しており、いかなる農村と置き換えてもいいのです。どこの農村にもある、あるいはあったのが帳箱で、そこに納められている文書の一枚一枚に光をあて、中央から出された法令の矛盾を突き、従来の中央史を塗り替えていこうとします。こうした試みが、佐渡にどっしりと根を下ろしている書物であるが故に成功しています。

著者の、「村から歴史を見る」という視点は、すでに1985年に『天領佐渡1・2』（刀水書房）で披露されており、本書はその補充改定版として位置付けられます。前者には、文書、景観、史跡など数多くの写真がのせられていますので、あわせてご覧にな

れば、本書の理解がより一層増すでしょう。さて、前者が概ね時代別に綴られているのに対して、本書はテーマ別に編まれています。以下、そのテーマ（章）を紹介しつつ、評者の見つけた金銀の一部をお見せしたいと思います。

序「村への視点、村からの視点」：こうした視点に対して共感を覚えない人はまずないでしょう。歴史学においても戦前はともかく、地方史、民衆史には現在すでに市民権が与えられており、村からの視点を説く人は多い。ただ著者の姿勢は地方史のみを詳述するのではなく、絶えず意識の中に中央があり、中央を考えるが故に中央中心史を攻撃せざるを得ない、という新鮮さがあります。

第1章「村にとっての検地——太閤検地から元禄検地へ——」：検地は支配の側の都合で行われると同時に、村における百姓と土地のあり方とその質的变化の表現である、というのが著者の主張です。検地は一面において、自立する百姓たちの公平の要求の上に組み立てられたものである、という検地の基本的正確をしっかりとおさえ、それは太閤検地、元禄検地両者に共通するとしています。では一体、農民が検地に何を求めたか、荻原重秀の手による元禄検地で年貢額が80%も増えたのに農民の組織的な反抗が全くなかったのはなぜか、そんな点に注目して本章を読むと興味が増します。

第2章「土地所有の思想——領有・惣有・私有——」：ここでは、中世の領有、戦国時代からの惣有、寛文期からの私有という土地所有に関する思想と、その変化の過程を開発、売買などの事例をあげてわかりやすく説明してあります。その中で、わが国にあって「地主」の基本的性格は、近世初頭、百姓の土地所有権・土地耕作権が確立したとき以来、不耕作地主でありつづけたとしなければならない、という指摘は斬新です。こうした観点に立てば、17世紀初頭の鉱山師の土地集積、広範の地主商人の成長などが無理なく理解できます。

第3章「村の身分制——大家と名子——」：中世に広範に存在した大家と名子の制度は、耕地や生産のありようが変わらない地域にあっては、江戸時代に至っても名子は再生産されつづけているとし、ここでも生産のありようが身分制を規定する大きな要因であるとしています。この生産関係を重視する点が著者の力点の一つであり、それはとりもなおさず、村の実情をまず始めに押さえないという、繰り返